

「アメリカ」合衆國其他對荒木貞夫其他訴松事件

供 述 書

私、岡田啓介ハ宣誓ノ上次ノ通り供述致シマス。  
私ハ一八六七年（明治元年）日本國福井縣ニ生レ  
マシタ。一八九九年（明治三十二年）ニ海軍兵學  
校ヲ卒業シテ以テ一九二〇年（大正九年）ニ至ル  
迄日本海軍軍人トシテ次ノ職ヲ奉ジマシタ。

明治卅七年—卅八年

浪速艦分隊長、後ニ同艦艦  
長。

（東郷海軍大將ノ指揮下）

明治四十一年

海軍大佐ニ昇進。

大正二年

鹿島艦長ニ補セラレル。

大正三年

海軍少將ニ昇進シ、佐世保

鎮守府司令官ニ補セラレル。

大正六年

海軍中將ニ昇進シ佐世保鎮

守府司令官ニ補セラレル。

一九二〇年（大正九年）カラ一九三六年（昭和十  
一年）迄ノ間ニ私ハ日本政府及海軍部内デ次ノ職  
ヲ奉ジマシタ。

大正九年

海軍次官



大正十三年

海軍大將ニ昇進シ、軍事參

議官ニ補セラレル。

大正十三年十二月

聯合艦隊司令長官

昭和二年

横須賀鎮守府司令長官

昭和二年

田中内閣ノ海軍大臣

昭和四年七月

内閣ト共ニ併任シ軍事參議

官ニ補セラレル。

昭和七年

齋藤内閣ノ海軍大臣

昭和八年一月

同職ヲ併任、豫備役ニ編入

セラレル。

昭和九年三月

内閣總理大臣

私ハ海軍次官、田中内閣ノ海軍大臣、軍事參議官、齋藤内閣ノ海軍大臣及内閣總理大臣ノ諸職ヲ奉ジター一九二〇年（大正九年）カラ一九三六年（昭和十一年）ノ期間中是等ノ諸職ノ職務ヲ執行シソノ職責ヲ果ス目的ヲ以テ時局問題、出來事、論争點及事件等ニ關シ出來ルダケ精通シテ置ク爲、凡ユル公的情報機關ヲ使用スル義務ヲ持チ、且之ヲ使用シタノデアリマス。斯ル情報ノ経路ハ就中私ノ各幕僚ノ幹部、行政官及職員カラノ報告及是等ノ人々ノ協議、閣僚トノ協議、是等ノ諸問題ニ關シテ私ト同様ニ同ジ情報出所ヲ持ツテ居タ各首相、議會人及其他ノ官吏トノ協議、閣議、聯絡會議、軍事參議官、其他ノ政府機關ノ會議、並政府ノ公報、發表等ヲ含ンデ居タノデアリマス。



カクシテ得タ情報ニ基キ、私ハソノ職責ヲ果スニ當リ時局問題及論争點ニ關シテハ、ソノ時ノ情況ニ於テ適宜適當ト認メラレタ公的措置ヲ取ラント努力シ各取ツタノデアリマス。

私ガ田中内閣ノ海軍大臣トシテ在任中（自昭和二年至同四年）日本ハ滿洲ニ於テ緊要ナ權益ヲ條約、協定等ニヨリ獲得シタト稱シタノデアリマス。田中内閣ノ政策ハ滿洲ノ官憲トノ協力ニヨツテ是等ノ權益ヲ最大限ニ擴張シテ發展セシメル事デアリマシタ。此ノ政策ハ滿洲ニ對シテ施行及適用スルニ當リ田中内閣ハ前内閣ヨリハ大イニ活發的、肯定的及積極的デアリマシタ。

此ノ目論見ニ關シ田中ハ當時滿洲ノ事實上ノ統治者デアリ元帥デアツタ張作霖ト協力シ且彼ヲ利用セント企テタノデアリマス。張作霖ハ日本ノ諸要求ノ中多クノモノニ反對デアツタケレドモ、田中ハ張作霖ニ對シ彼ガ滿洲ニ於ケル首領トシテノ地位ヲ維持スル爲日本ハ彼ヲ援助スルカモ知レナイト言フ交渉權並取引權ヲ持ツテ居タノデアリマス。日本ハ張作霖ニ對シ、特ニ一九二五年（大正十四年）ノ郭松齡叛亂事件ニ關シテ相當ノ援助ヲ與ヘテ居タノデアリマス。

田中内閣ハ張作霖ニ對スル援助及協力ニヨツテ滿洲ニ於ケル日本ノ權益擴大ガ相當ニ進歩シテ居ルト考ヘタノデアリマス。充モ田中ハ常ニ張作霖ニ對シ彼ガ滿洲ニ歸還シテ滿洲問題ニ專念スベキデアルト言フ立場ヲ取り、且ソレヲ彼ニ勸告シタノ



デアリマス。一九二八年（昭和三年）張作霖軍が國民黨ニヨリ敗北ヲ喫シタ時、田中ハ再ビ張ニ對シ手遅レトナラヌ内ニ彼ノ軍隊ヲ滿洲ニ撤退セヨト勸告シマシタ。此ノ際張作霖將軍ハソノ當惑セル軍事的立場ニ鑑ミ己ムヲ得ズ此ノ勸告ヲ受入レマシタ。此ノ時ニ到ツテ奉天ニ司令部ヲ置ク本庄將軍下ノ日本軍ハ滿洲ニ於ケル日本ノ權益ニ關シ張作霖ト協力シテ交渉スルト言フ田中内閣ノ政策ニ對シテ不満ヲ拘クヤウニナリ且交渉ヲ待タズシテ武力ヲ以テ滿洲ヲ占領セント待チ兼ネテ居マシタ。此ノ軍ノ將校ノ或一派又ハ一國ハ本庄將軍ヲ全ク隔離シ、軍務ニ關スル通信カラ遮斷シテ置イテ後、張作霖ガ歸滿スルニ際シ彼ヲ殺害スル陰謀ヲ企テタノデアリマス。彼等ハ一九二八年（昭和三年）六月四日張作霖ガ北京カラ奉天ニ向ツテ旅行シテ居ル列車ヲ奉天外ニテ軌道上ニ仕掛ケテ置イタ爆發物ヲ以テ破壊シヨウト準備シマシタ。此ノ計畫通り張作霖ハ殺害セラレマシタ。關東軍ノ一派ニヨツテ企テラレ、且實行セラレタ此ノ事件ハ田中政權中ニ於ケル政府ノ政策樹立ニ自ラ突出デントスル軍ノ最初ノ歴然タル行爲デアリマシタ。此ノ事件ハ滿洲ニ關スル田中内閣ノ政策ヲ著シク困惑セシメ且不利トナラシメ、遂ニ田



中内閣ノ辭職ヲ余儀ナクシタ危機ヲ生ゼシメタノ  
 デアリマス。内閣ハ直ニ此ノ事件ノ發生ヲ知り、  
 全く不意ヲ打タレテ非常ニ憂慮シマシタ。田中首  
 相ハ之ヲ非常ニ遺憾トシ且容易ナラザルモノトシ  
 テ宮中ニ參内シ陛下ニ詳細ナル報告ヲ上奏シマシ  
 タ。宮中カラ歸邸スルヤ首相(田中)ハ陸軍大臣  
 (白川大將)ト私ヲ協議ニ招キ、陛下ガ彼(田中  
 )ニ今こそ陸軍ニ對シテ強硬ナル懲戒處分ヲ取ル  
 ベキ時デアリ、且陛下モ充分ナル指置ガ取ラレル  
 コトヲ期待スルト仰セラレタト我々ニ告ゲマシタ  
 。彼(田中)ハ陸軍内ノ軍紀ヲ守ル爲ニ適當ナル  
 措置ヲ取ルベク決心シタト述べマシタ。陸軍大臣  
 (白川大將)ト私ハ田中首相ノ決意ニ對シテ滿腔  
 ノ支持ヲ表明シマシタ。併シ乍ラ陸軍大臣ガ此ノ  
 事ヲ陸軍省デ取上ゲタトキ、參謀本部員ヤ他ノ陸  
 軍將校カラ猛烈ナ反對ヲ受ケテソノ結果彼ハ何等  
 ノ進捗ヲナシ得ナカツタトデアリマス。陸軍大臣  
 ハ田中ト私ニカク報告シ且陸軍ノ此ノ反對ハ右事  
 件ニ付責ヲ負フベキ者ニ對シテ處罰措置ヲ取ル事  
 ハ陸軍ガ當時内證ニシテ置キタイ或事ヲ社會ニ曝  
 露スル事ニナルト言フ見解ニ基イテ居ルト述べマ  
 シタ。其後間モナクシテ田中ハ此ノ問題ヲ協議ス  
 ル爲私ダケヲ呼ンデ本事項ニ關シテ何等カノ處置  
 ヲ取ルベク企テントスルト告ゲマシタ。私ハ是ニ



對シテ贊意ヲ表シマシタガ、懲戒處分ニ對スル陸軍ノ反對ハ餘リニモ強硬デアツタ爲、田中モ何モ成シ得ナカッタノデアリマス。此ノ時既に此ノ問題及陸軍ノ態度ハ閣外ニ於テ又政界ニ於テモ論議セラレルニ到ツテ陸軍ヲ取締リ懲戒シ得ナイ内閣ノ無能力ハ一九二九年（昭和四年）七月一日内閣ノ辭職ヲ餘儀ナクシマシタ。張作霖殺害ノ後、滿洲ニ關スル政府ノ政策樹立ニ參畫スル點ニ關スル限り、陸軍ノ勢力ハ漸次強化セラレマシタ。一九二九年（昭和四年）七月一日田中内閣ノ瓦解カラ一九三二年（昭和七年）齋藤内閣ノ成立迄ノ期間中、私ハ軍事參議官ヲ奉職シマシタ。此ノ期間中私ハ私ヲ私邸ニ訪シ又ハ公的或ハ社交的集リデ會ツタ在任中ノ大臣其他ノ政治家及官吏ト、武力ニヨツテ滿洲ニ日本ノ傀儡政府ヲ樹立スル以外ニ滿洲問題ハ決シテ解決出來ナイトスル陸軍ノ理念ニ關シ日本政府内ノ或人々ガ持ツ重大關心ヲ協議シタ事ガ屢々アリマシタ。私ハ陸軍ノ斯ル傾向トソレヲ取締リ得ナイ政府ノ無力ニ付非常ニ憂慮シマシタ。陸軍ガ滿洲占領ニ取掛ル事ハ單ニ時間ノ問題デアルトハ國事ニ關心ヲ持ツテ居タ凡テノ人々ニハ此ノ期間中ニ明ラカトナツタノデアリマス。一九三一年（昭和六年）ノ初頭ニ私ハ陸軍ガ滿洲國占領ノ基礎トナシ得ベキ事件ヲ企テ居ルト言フ



報告ヲ多數受ケマシタ。ソレト同時ニ大川周明ハ公開演説及出版物ニヨリ、陸軍ノ斯ル行動ヲ支持スル輿論ヲ造リ上ゲントスル宣傳運動ヲ行ツテ居マシタ。私ハ大川ガ海軍兵學校デ此ノ様ナ講演ヲ爲シタト聞イタ時ノ困惑ヲ想ヒ出シマス。斯ル人ガ生徒ノ前デ話ヲスル事ヲ許サレタト言フ事ハ私ハ特ニ腹立シク思ヒマシタ。一九三二年（昭和七年）齋藤内閣ノ海軍大臣ニ就任致シマシタ時、私ハ一九三一年（昭和六年）九月十八日發生シタ事件ハ關東軍ノ一派ガ計畫シ用意シタ事。且同事件ハ其後陸軍ガ滿洲占領ニ付採ツタ行動ヲ正當トスル程ノ重大性ヲ持ツテ居ナカツタト言フ事ヲ最近ノ數ヶ月ニ起ツタ事件ニ精通スル爲ニ要求シテ受ケタ報告及關係其他ノ官吏トノ會談及會議等ヨリ承知致シマシタ。此ノ期間ノ數年間陸軍ハ政府ノ取締リカラ全然離レ、何等ノ拘束モ受ケナカツタノデアリマス。此ノ情報ハ私ガ田中内閣瓦解カラ齋藤内閣成立迄ノ期間ニ於テ當時ノ新聞報道、政府發表及他ノ官吏トノ接觸等ニヨリ入手シタ情報ニヨツテ補足セラレ確證セラレマシタ。以前ニモ述ベタ通り、陸軍ガ武力ニヨツテ滿洲ヲ占領スル行動ニ出ルノハ單ニ時間ノ問題デアルト言フ事ハ一九三一年（昭和六年）ノ初頭ニ於テ政府筋ハ想定シテ居タ事實デアリマス。私ハ大川周明ガ當時



關東軍ノ此ノ行動ト明ニ關係シテ居ルト知ツテ居マシタ。名ハ思ヒ出シマセンガ關東軍ノ青年將校モ多數之ニ關係シテ居リマシタ。一九三一年（昭和六年）九月十八日ノ所謂奉天事件ヲ契機トシテ滿洲占領ハ同年ノ後期ニ行ハレマシタガ、日本ノ賢明ナ官公吏ハ之ニヨリ不意ヲ打タレマセンデシタ。ソノ他ニ居タ凡テノ日本軍ハ直チニ行動ニ移リマシタ。此ノ中ニハ勅裁ヲ經ズシテ國境ヲ越エ、占領ニ參加シタ朝鮮軍モ含マレテ居マシタ。之ハ當時政府部内ニ深刻ナ問題トナツタ「越境」事件ト知ラレテ居マス。以上ノ事實ノ中或物ニ關シテハソノ發生以前又ハ同時ニ於テ具體的ニ直接關イタノデハアリマセンガ、是等ノ各事實ニ關シテハ發生シタ即時ノ期間ニ公式ノ經路ヲ通ジテ知リマシタ。

是等ノ事實ハ當時政府部内ニ於テ一般ニ認めラレタ事實及前提トナリ、之ニ基イテ官公吏ハ公式措置ヲトツタノデアリマス。

私ガ海軍大臣トシテ奉職シタ一九三二年（昭和七年）五月成立ノ齋藤內閣ト一九三四年（昭和九年）七月生レタ私ノ內閣ハ政府及陸軍部内ニハ「海軍內閣」ト知ラレテ居マシタ。亞細亞ニ於ケル日本勢力ノ擴大ニ關聯シテ武力ヲ行使セントスル陸軍ノ政策ニ反對スル海軍勢力ヲ此ノ二ツノ內閣ニ



認メルト理由デ陸軍ハ之ヲ怨ンダノデアリマス。海軍ガ是等ノ内閣ヲ組織スル事ヲ頼マレタノハ武力行使ニ關シテ陸軍ノ我儘ヲ阻止センガ爲デアツタ事ヲ陸軍ハ知ツテ居リ、是等ノ内閣ノ存在中陸軍ハ政府内ニ於ケル海軍勢力ヲ打倒スル努力ヲ續ケタノデアリマス。陸軍ノコノ怨ヲ示ス多クノ事件ガ是等ノ内閣ノ存在中發生シ、遂ニ私ニ對スル暗殺未遂ガ一九三六年（昭和十一年）二月行ハレ、ソノ結果私ノ義弟デアル松尾氏カ私ト間違エラレテ暗殺セラレタノデアリマス。此ノ事件ハ陸軍ノ野心ニ對スル當時ノ政府ノ同情缺如ニ對シ陸軍ノ青年將校ノ一團ガ抱イテ居タ怨ノ自然的勃發デアリマシタ。之ハ私ガ主宰スル内閣ガ陸軍ヲ取締ルノニ無力デアルト言フ事ヲ幾分か公然ニ表示シタルモノデアアル爲陸下ニトツテハ困惑的情勢デアリマシテ、一九三六年（昭和十一年）三月私ノ主宰スル内閣ハ遂ニ辭職シタノデアリマス。滿洲占領後、一九三二年（昭和七年）ノ初頭ニ所謂獨立政府ガ樹立サレテ、ソノ獨立ハ同年九月日本ニヨツテ想像的ニハ承認セラレタノデアリマスガ、關東軍ガ實質上ノ政府デアリマシタ。此ノ政府ハ關東軍ニヨリ完全ニ支配且操縦セラレテ居マシタ。當時日本政府ハ關東軍ノ計畫及行動ニ關全然知ル道ガナカツタノデアリマス。陸軍



ハ完全ニ日本政府ノ支配外ニアリ、ソシテ此ノ状態ハ一九四一年（昭和十六年）ニ大戦勃發迄續イタノデアリマス。此ノ事ハ列國間ニ於ケル日本ノ指導的立場ノ爲ニ遺憾千萬ニシテ恥辱的ナ事デアリ且アツタ。私ハ之ニヨツテ言ヒ盡サレナイ心配ト苦悶ヲ感ジマシタ。日本ハ非道ナ不正ヲ受ケタノデアリマス。

岡田 啓介

右岡田啓介ハ一九四六年（昭和二十一年）五月二十九日陸軍省ビル内ニテ本官ノ面前ニテ宣誓ノ上本供述書ニ署名セリ

聯合國軍最高指揮官總司令部

國際檢察 部 執行 官

騎兵中佐 テオドア、グールスビ

證 明 書

予、高橋亘ハ次ノ如ク證明ス。

予ハ日英兩國語ニ通曉シ且本日前記供述書ヲ前記岡田啓介ニ日本語ニテ讀聞カセリ。之ヲ爲スニ當リ予ハ前記供述書ノ内容ヲ英語ヨリ日本語ニ忠實且正確ニ譯セリ。前記岡田ハ該供述書ノ内容ハ眞實ニシテ、彼ハ該供述書ヲ宣誓ノ下ニ喜ビ署名スルト述べタリ。前記岡田ハ予ノ面前ニテ正式ニ宣



誓シ且該供述書ヲ宣誓ノ下ニ予ノ面前ニテ署名セ  
リ。該宣誓ヲ爲シ、且該供述書ニ署名スルニ就イ  
テノ凡テノ手續ハ日本語ヨリ英語ニ、又英語ヨリ  
日本語ニ忠實且正確ニ譯セラレ、該供述者ニヨリ  
充分理解且了解セラレタリ。

一九四六年（昭和二十一年）五月二十九日

日本東京ニ於テ

高 橋 亘